

# ビルダーボーゲンに見る家庭観

宇佐美 幸 彦

## 1. 「望ましい家庭像」

ビルダーボーゲン（以下、略してボーゲンという）は、19世紀にドイツで大量に発行された大衆的メディアである。この中には19世紀の庶民の現実や、夢、考え方が様々な形で反映されている。とりわけノイルピーンのグスタフ・キューン社（以下、GK社）の発行した作品には、「教育的」な内容のものが多く、「教育的」な作品のなかには、(1)アルファベットの文字などを教えるもの（ドイツ語教育）、(2)家畜や、世界の動物・植物などを図で示すもの（動物・植物図鑑）、(3)宗教的な教えを普及するもの（宗教的精神修養）、(4)市民道徳を向上させようとするもの（道徳教育）などがある。この最後の「道徳教育」をめざす作品のなかには、家庭問題を扱った作品が多数ある。その中でまず取り上げたいのは、幸福な家庭生活を描き、鑑賞者がこれを模範として家庭円満に暮らすようにという意図で作成されたボーゲンである。1861年発行の『結婚による家族の幸せ』（NRGK-04344 Eheliches Familienglück）には、次のような韻文のテキストが印刷されている。

私は愛らしい妻を見出し、  
かわいい子宝に恵まれた。  
愛する家族というならば、  
それが私の最も楽しい時。

愛の心から、愛らしい妻を  
捜し求める男性は幸せなり。  
あさましい物欲で求婚するなかれ。  
それは家庭に不和をもたらすのみ。

家庭を思う心と静かな礼節、  
それが女性の評価を高める。  
しからば、心配事が起きても、  
皆、家の中心に來れば安心できる。

大金をはたき、身を飾る、  
それは、どの娘もできるわけではない。  
世間が間違った評価をしようが、  
幸福の光は、高い徳性から生まれるもの。

誰もが金を目当てにすれば、  
貧しい娘はどこへ行けばいいのか。  
いつもケンカばかりしている夫婦は  
離婚するまで争い続けるだけ。

男性は、相手を選ぶとき、  
家庭を思う心と、静かな徳性を求めよ。  
花咲く若い時代に、ささやかな料理を  
作る妻を得た男性は幸せなり<sup>1</sup>。

---

1 Riedel, Lisa und Hirte, Werner: *Der Baum der Liebe*, Berlin (Eulenspiegel Verlag), 1981, S. 71.

この歌詞がつけられたボーゲンの図版は1枚で、壁には風景画の額縁がかかり、豪華な花束の飾りがある立派な部屋の中で夫婦と4人の子供たちが着飾った服装で描かれている。男性（父親）は画面の右側で将校の軍服のような服装<sup>2</sup>をして立ち、左側で女性（母親）は戯れる子供たちに囲まれて椅子に座っている。この女性も子供たちもレース風の襷のある華やかな服を身につけている。このボーゲンは19世紀中葉の市民層の理想的な家庭像を描いている。このボーゲンは3つの観点からとらえる必要があろう。それは、(1)核家族化した市民の家庭生活、(2)収入の安定した豊かな暮らし、(3)女性に求められる家庭性である。(1)の点ではこの作品は新鮮さを示しているが、(2)と(3)の点では、現実から離れ、19世紀の理想化された家庭像が、「教育的」に描かれているといえよう。

ブランクらの論文は、このボーゲンと『泉のほとりでの朝食』（NRGK-02503-Das Frühstück an der Quelle, 1851年）とを比較し、後者ではまだ古い大家族制（家族のほかにお手伝いの女性たちが描かれている）と強い家父長制（男性が画面の中央のテーブルに座り、手を挙げて指図をしている）が示されているのに対して、前者は、両親と子供だけの近代的な核家族を描き、また子供と女性（母親）が中央に配置され、男性（父親）は右奥に追いやられ、家族の中心的位置から外れていることを指摘している。そしてさらに、ここで母親は「聖母マリア」のように子供たちにやさしい眼差しを向け、子供たちの守り手であることを示しているのに対して、外套を着た男性（父親）は、仕事で家族から離れがちで、「訪問客」のように描かれている、と説明されている<sup>3</sup>。確かに従来の子供や女中などの奉公人

2 ヘルトはこの服装についてポーランドのペケーシェ（Pekesche）を思い起こさせると述べている。Held, Claudia: *Familienglück auf Bilderbogen*, Bonn (Dr. Rudolf Habelt), 1992, S. 70f.

3 Blank, Melanie u. a.: *Die Frauen sind die Repräsentanten der Liebe*, in: Brakensiek, Stefan (hrsg. von): *Alltag, Klatsch und Weltgeschichten: Neuruppiner Bilderbogen; ein Massenmedium des 19. Jahrhunderts*, Bielefeld (Verl. für Regionalgeschichte), 1993, S. 63ff.

との共同生活から、夫婦と子供という家族だけの市民生活へと基本的に変化するのには19世紀であり、それに伴い大家族の家父長から、小家族の父親への変化という点は、このボーゲンから見てとれるかもしれない。

しかしこの作品を観察する上でもっと重要な点は、このボーゲンが現実そのものよりも、ビーダーマイアー的な「望ましい姿」(理想像)を描いている点である。男性は豪華な服装からして社会的に地位の高い人物であり、立派な部屋や家族の衣装からすれば安定した高い収入があると見受けられる。テキストでは、金銭よりも徳性が大事であると述べられてはいるが、この図版に描かれたような豊かな生活をする市民がいったい当時どれくらいいたであろうか。この絵に描かれた家庭は、一般庶民の平均的な収入をはるかに超え、かなりの高額所得者ではなかろうか。制作者は一般市民の現実よりも、達成目標をここに描いているのではないだろうか。

またフランクらはマリアのような慈悲深い母親の役割が重視されていると、この絵を積極的に評価しているようであるが、テキストを読むと、男性側から女性の家事のすべてが押しつけられており、女性だけに「徳性」(礼節)と「家庭性」が求められているのである。女性が家庭の「中心」(Mitte)ににいることが意味するのは、女性の家庭外における社会的な役割は皆無ということであり、男性が家庭内で果たすべき役割も限りなくゼロに近いということである。これは19世紀的な男女の役割分担の「望ましい姿」ではあろうが、男女の平等という点が全く配慮されていないことについて、フランクらが一言も述べていないのは大いに疑問である。この作品は、これを見る庶民に対して、「家庭的」な、「徳性の高い」妻を持てばこのように幸せになれるという見本を示し、とりわけ女性の「道徳的教育」を行おうとする意図が含まれている19世紀的なボーゲンである。

## 2. 男性と女性

次に男女の役割の違いを強調した作品を取り上げたい。時代的な条件が

ら当然のことながら、現代の男女平等の考え方とは全く異なり、男女の違いを固定的に描くボーゲンが多数存在する。GK社から発行されたものの中に『男の子の遊び』（NRGK-01985-Knabenspiele, 1847年）、『女の子の遊び』（NRGK-01984-Mädchenspiele, 1847年）と題された2枚のボーゲンがある。当時の子供の服装や道具類も興味深い<sup>3</sup>が、当然のことながら、男女の性差の扱いはこの時代の一般市民の通念を反映している。それぞれ16コマの絵が描かれ、子供の遊びが紹介されている。

『男の子の遊び』の絵とテキストは、(1) (小太鼓たたき、鼓笛隊)「元気のいい太鼓の音はどんな男の子にもすばらしい」、(2) (士官、命令の発令)「『前へ進め』と、士官は叫ぶ、全員が僕に続く」、(3) (アーチェリー)「アーチェリーは楽しい、視力を鍛えるのだ」、(4) (御者、車に乗ったおもちゃの人形を引く)「僕らは御者遊びも好きだ。この乗物はすてきだろ」、(5) (分隊長)「『担え銃』と、分隊長が叫ぶ、これは絶対命令だ」、(6) (騎馬兵)「僕は速い馬にまたがる、すると敵はおののく」、(7) (ボール投げ)「ボールは高く飛び、それから僕はそれを捕える、取りそこなってはたいへんだ」、(8) (フルート演奏)「少年は楽しい曲を弾き、皆の耳を楽しませる」、(9) (中世騎士)「槍と盾を持って戦いへ、大昔の騎士だ」、(10) (狙撃兵、鉄砲遊び)「部署でなくとも、敵を発見すれば、すぐに弾を装填する」、(11) (ボール打ち)「よく見ろ、僕はきつと球をかつ飛ばす、君は上手に取ってくれ」、(12) (体操、鉄棒)「体操は楽しい、だからどんどん練習するんだ」、(13) (九柱戯)「九柱戯は体力を強くし、その上、楽しみにもなる」、(14) (縄跳び)「僕は素早く縄を跳ぶ、君ができないのは体が硬いからだ」、(15) (歩哨)「少年は歩哨を忠実に果たしている、交代要員が早く来ればいいのに」、(16) (騎馬兵)「かわいい少年を見たまえ、小さいが怖い騎馬兵だ」、である<sup>4</sup>。

4 Brakensiek, a. a. O., S. 72.

このように軍人または昔の戦士のまねをする遊びがほとんどで、9コマが剣や鉄砲を持ったり、歩哨に立ったりする子供を描いている。他の7コマは、御者、ボール（2コマ）、笛、鉄棒、九柱戯、縄跳びである。

『女の子の遊び』の絵とテキストは、(1)（花束編み）「私は（女）友達のためこの花束を編んで贈り物にする」、(2)（小鳥の飼育）「大好きな小鳥さん、おまえを大事にするよ」、(3)（落ち穂拾い）「熱心に麦の束を作り、エプロンに落ち穂を入れている」、(4)（妹の散髪）「妹ちゃん、あなたの散髪をします、逃げまわってはだめよ」、(5)（小鳥の餌やり）「この鳥は私の手からえさを食べる、歌のご褒美よ」、(6)（人形の散歩）「人形もお散歩しなくっちゃ、へんな姿に見えないかしら」、(7)（犬の飼育）「私にはかわいい犬がいる、賢くて、よく言うことを聞くの」、(8)（花の世話、図では踏まれた花に十字架を立て祈る様子）「あらひどい、この盛り土に植えておいた私の花をふんづけたのは誰」、(9)（猫とボール遊び）「ネコちゃん、ボールをとっといで、私はこの遊びを見るのが大好き」、(10)（読書）「素敵な本を読むのは楽しい、恋愛の事も書いてある」、(11)（小鳥の観察）「あそこで、小さな雛たちが巣の中で餌をほしがって鳴いてるわ」、(12)（花束作り）「私は花束を編んだ、これは恋人のためよ」、(13)（オウム飼育）「私の言うことをよくお聞き、すてきな言葉を教えましょう」、(14)（人形をあやす）「人形は子供の腕のなかで眠っている、まるで人間の子のように無邪気に」、(15)（お祈り）「よい子は信心も深い、いつもすぐにお祈りに出かける」、(16)（花飾り作り）「娘は美しい花を胸につけきれいに飾る」、である<sup>5</sup>。

これらを「遊び」と言うべきかどうか疑問であろう。16コマのうち、「穂を摘む」、「妹の散髪をする」などむしろ完全な労働とみなされるものが2コマ、動物の世話や、花を育て、花束を作るという、準労働とみなされる

---

5 A. a. O., S. 71.

ものが9コマ、祈りと読書、自然観察がそれぞれ1コマで、常識的に考えて「遊戯」の範疇に入ると思われるのは、人形遊びをしている2コマだけである（第8コマは花の葬式をしているので、祈りとみなすこともできようが、歌詞の内容から花の栽培と算定した）。女の子はあまり「遊び」をしなかったのであろうか。それとも制作者が女の子は家庭で遊ばずに、働くべきだと考え、家事労働に励む「模範的な女の子」を取り上げているのであろうか。男の子は「軍国少年」に、女の子は「家事労働者」として育てようとする「教育的」意図がこれらのボーゲンにあるように思われる。

19世紀の中葉においては、女性の社会的進出は非常にわずかであったが、女性たちが働いていないわけではなかった。ベルゲマン社発行の『女性の仕事』(NR-Bergemann-01295-Weibliche Beschäftigungen, 1860-61年)は16コマの絵で、当時の女性たちの仕事を示している。絵の概要（かっこ内の斜字体）とテキストは次のとおりである。

- (1) (糸繰り車を回す)「ユルヒェンは熱心な子で、小さな子には珍しく、だれもが喜ぶほど、彼女はいつも働こうとする」
- (2) (帽子を作る)「美しいドレスには帽子が合う。これがよい服装だ。私はいつもきっちりとする。きっちりしなければ始まらない」
- (3) (糸をつむぐ)「シュル、シュル、私のつむぎ車は回る。私は小さな娘だがこの手でどんどん仕事は進む。これはみんなが知っている」
- (4) (人形の世話をする)「人形さんは何も食べてないので元気がない。だから可愛い人形さん、私が一杯食べさせてやりましょう」
- (5) (魚網を作る)「小さな目の大きな網。これで大漁だ。そう思うと元気になる、私はどんどん網を編む」
- (6) (アイロンをかける)「ごらんの通り、私は腕がいい。それは誰もが知っている。だから私はいつも元気で、日が沈むまでアイロンかける」
- (7) (ブドウを収穫する)「ブドウの汁は甘い。それを味わえば、私は元

気になる。私は行儀がよくて、お母さんは大喜び」

- (8) (編み籠を作る)「私はここで精いっぱい働く。仕事は楽しく、他の人たちには不満があっても、私はよく働く子だ」
- (9) (野菜を頭の上の籠に乗せ運ぶ)「私は農園から町へと運んでいく。主婦たちが待っている。大きな野菜も小さなものもみんな私の所で買ってくれる」
- (10) (洗濯をする)「無駄口をたたくのはよくないが、私たちは洗濯物をたたく。十分働いて家に帰れば、おいしい御馳走の時間だ」
- (11) (学習する、娘が膝に乗せた犬に話す)「ABCを習わないのはよくないことよ。誰にも尊敬されないわ。だからよく考えて、勉強なさい」
- (12) (果物を売る)「皆さん、買ってくださいな。お安くしますよ。この果物はなんときれいな笑顔でしょう。さあ皆さん買ってくださいな」
- (13) (オウムを飼育する)「かわいいオウムさん、今そちらへ行って砂糖を一つやりましょう。でもその前に、あなたのお名前言ってごらん」
- (14) (編み物をする)「編み物は楽しい。他のことなど私はしたくはない。編み物の道具の所に座ると、心がカッカとすることなどない」
- (15) (シーツを干す)「何度見ても、シーツは雪のように白い。だから熱心に働いて、いやになったりすることはない」
- (16) (部屋を整理する)「私は忙しく働かなくては、暮らしていけない。それは人々を喜ばせることでもあり、私はいつも精を出す」<sup>6</sup>

第4コマの人形遊びと第11コマの学習は、収入を得るような労働とは言えず、第13コマのオウムの飼育も半分は趣味のようなものと考えられる。しかしそのほかの労働は当時の女性にとって典型的な仕事であったと思われる。野菜と果物の販売以外はほとんど家内労働ということが出来る(第2コマの帽子作りも、図版からすると工場で働いているのではなく、家の

---

6 A. a. O., S. 62.



中の内職のような様子である)。

### 3. 家庭教育

上記の『女性の仕事』においても、勤勉に働くこと、労働が楽しみであることを強調して、道徳的な「教育」を行おうとする意図が見受けられるが、さらに積極的に「家庭教育」を前面に出す作品がある。この種のボーゲンはもっぱら「女性に対する教育」を徹底しようとしている。女性に対して求められる重要な項目は、①勤勉さ、②控えめな態度、つつましさ、従順さ、忠誠心、③キリスト教的信仰、④虚栄心や虚飾の排除、⑤家庭性、⑥注意力、男の虚言を見抜く賢さ、⑦道義、まじめな態度、⑧おしゃべりをしない、めそめそしない、⑨清潔さ、純潔さなどである。

GK 社では『娘のための大切な ABC』(Goldnes ABC für Jungfrauen)を第1部と第2部の2回にわたって発行している。「ABC」というタイトルからしても学ぶべき教育的な作品であるという制作者の意図が表れている。それぞれ12のコマで、アルファベット順で当該の文字がつく重要な単語を含んだテキストがつけられている。第1部(NRGK-02324-Goldnes ABC für Jungfrauen, 1850年)は次のような内容である(かっこ内の丸数字は上記の項目のうち特に強く求められているもの)。

- (1) (A)「仕事 (Arbeit) を喜んで引き受け、せっせと励む娘は、やがて年老いる (Alter) まで、彼女をリードしてくれる男性のために、上手に家計を運ぶだろう」(①、②)
- (2) (B)「だが、今日は、すべてを成し遂げたなどと、大声で自慢してはならない。控えめな態度 (Bescheidenheit) がないと、花嫁 (Braut) になるのは難しい」(②)
- (3) (C)「また立派なキリスト教徒 (Christin) でなければならない。神を信じなければ、幸福はやってこない。そんな娘は物笑いの種になるだ

けだ」(③)

- (4) (D)「死ぬまで、両親への愛と感謝 (Dankbarkeit) を大事にせよという戒律を守らねばならない」(②)
- (5) (E)「虚栄心 (Eitelkeit) を捨てなさい。飾り立てに時間を使い、化粧ばかりしているなら、笑われてしまう」(④)
- (6) (F)「娘が気まぐれ (Flattersinn) ではなく、陽気な心 (Frohsinn) を持てば、勇気もわいて、いいことが起こるだろう」(⑦)
- (7) (G)「神への畏怖 (Gottesfurcht) が心を飾る。うまく (gut) 行っても行かなくても、すべてをお恵みとして受け入れなさい。質素に正しく暮らしなさい」(②、③)
- (8) (H)「娘は家庭的 (häuslich) でなければならない。いつか結婚すれば、常に家庭を思う心 (Häuslichkeit) が、唯一の楽しみになるのだから」(⑤)
- (9) (I), (J)「怒り狂う (jähzornig) 娘は夫を得ることができない。自分を忘れるほど怒る娘には、だれも振り向かない」(②)
- (10) (K)「おべっか使いがすることを、理解して、そんな男に付け入るすきを与えないように賢く (klug) なくてはならない」(⑥)
- (11) (L)「とりわけ、恋愛 (Liebe) において注意を払わなくてはならない。一度キスを与えただけで、それ以上のことになってしまう」(⑥、⑨)
- (12) (M)「娘 (Mädchen) の榮譽が考えられなければならない。それは鋼鉄の板が、息がかかっただけで、その汚れを永久に拭い去ることはできないのと同じである」(⑨)<sup>7</sup>

第2部 (NRGK-02332-Goldnes ABC für Jungfrauen, II. Blatt, 1850年) も12コマで、その内容は次のとおりである。

---

<sup>7</sup> Riedel/Hirte, a. a. O., S. 10.

- (1) (N)「娘はだらしなく (nachlässig) したり、好奇心を見せたり (neugierig) してはならない。そんなことをすれば、誰にも好かれな  
い」(⑦)
- (2) (O)「しかし、娘がきっちりしている (ordentlich) と、だれからも好  
かれ、誰からも喜ばれ、すぐに夫に恵まれよう」(⑦)
- (3) (P)「娘はあまりおしゃべり (plaudern) をしてはならない。そんな  
ことをすれば、頭の悪いのが分かってしまい、皆におしゃべり女  
(Plaudertasch') と言われるようになってしまう」(⑧)
- (4) (Q)「めめめそして (quengelig) ばかりいると、娘の人生は苦痛に満  
ちる (qualvoll)。それは長期の苦しみのもと (Quell) になり、自分さ  
え好きになれない」(⑧)
- (5) (R)「早くから清潔さ (Reinlichkeit) を身につける娘は幸いなり。質  
素だが、清潔な (reinlich) 服、それが娘の最高の盛装だ」(⑨)
- (6) (S)「美 (Schönheit) は過ぎゆくが、道義 (Sittsamkeit) と優しさ  
(Sanftmuth) は常に (stets) 美しい。これを習得した娘の人生は幸福  
(Seligkeit) である」(⑦)
- (7) (T)「娘がいったん恋愛をしたら、永遠にそれに忠実 (treu) でなく  
てはならぬ。心を与えた相手には永遠にささげねばならない」(②)
- (8) (U)「純潔 (Unschuld) は美貌よりも立派な飾りである。だがそれを  
なくせば、2度と戻ってはこない」(⑨)
- (9) (V)「娘は進んで和解 (versöhnlich) しなくてはならない。権利を主  
張してはならない。自分の誤りをすぐに悟らねばならない。さもなく  
ば女性としてうまく暮らしてはいけない」(②)
- (10) (W)「娘に注意力 (Wachsamkeit) が欠けていると、決してうまくい  
かない。時間を十分に取れば、うまく切り抜けられよう」(⑥)
- (11) (X)「クサンテippe (Xanthippe) のようにいつも機嫌を悪くしてい  
る娘は、どんな男性からも避けられ、誰にも相手にされない」(②)
- (12) (Z)「だが、ケンカ (Zank) や争いをせず、誰とも仲良くする娘は幸

せなり。この現世でいつも満足 (Zufriedenheit) して暮らす」(②)<sup>8</sup>

男性に対するこのような「家庭教育」は、筆者の知る限り、ボーゲンには見当たらないので、女性にのみ従順さ、忠誠心、純潔を強く要求するのが伝統的な傾向であったこといえよう。

GK 社から 1861 年に発行された『愛すべきドイツの乙女たちよ』(NRGK-04343-Meine liebenswürdigen Jungfrauen Deutschlands) では、男性の立場から、自分の妻にふさわしい女性として次のような要求が述べられる。

(1) いつか私が求婚するなら

妻は愛らしい人に限る。(\*)<sup>9</sup>

美しいだけで、血が通わなければ不足である。

学識ある女にやり込められるのもごめんだ。

そうだ、その通り、いつか求婚するなら

妻は愛らしい人に限る。

(2) (\*) この言葉 (愛らしい) には魔法がある。

愛らしい妻は五月の朝のごとし。

さわやかに心の襷をあかるくする。

わが妻もかくあるべし。

(3) (\*) やさしいまじめさが品位を高める。

妻が笑う時、そこでは天が勝ち誇る。

夫を得れば、妻はその反照となるべし。

---

8 A. a. O., S. 11.

9 最初の 2 行は以下の連でもリフレイン、(\*) で示す。

夫の第二の自我と、妻はなるべし。

(4) (\*) 妻は詮索などせず、何事も感じ取るべし。

心で受け取ることが、

すべての情報源でなければならぬ。

妻というのはそういうもの。

(5) (\*) もし私がしくじった時、わが妻は

さげすみの言葉を吐き、泣き騒いで、

私を支配しようとしてはならぬ。

その時には、ただ愛の心で接してほしい。

(6) (\*) 妻の目がダイヤモンドほどに輝かずとも、

目には忠誠心による協調のしるしが表れていなければならぬ。

私が求婚するとき、

わが妻には忠誠を求めぬわけにはいかぬ。

(7) (\*) いつか私が死の縛りに取り巻かれた時、

私は妻の目に慰めを見出し、

死を前にして、妻を抱きしめ、

あの世でも妻が私のものとなることを望む<sup>10</sup>。

当時の女性たちは、社会的進出が閉ざされていたので、よい結婚することが人生の大きな目標であったであろう。ここではその最大の関心事である結婚が取り上げられ、よい妻の条件として、男性の側からこのような要求があることを、「教育」されるのである。支配的な社会通念として、男性

---

10 Riedel/Hirte, a. a. O., S. 28.

側から求められていることは、とりわけ「愛らしい (hold) こと」、「従順さ」、「忠誠心」である。また夫の「第二の自我」となれという要求には、あからさまに男性優位の立場が表明され、女性の個性や人格に対する配慮は全く見られない。このようにボーゲンにおける家庭円満と幸せな結婚は、女性の側の忍耐と服従の上に成り立っていたと考えざるを得ない。

#### 4. 不可能な願望、夢の世界

ボーゲンの世界は、庶民の現実的な生活を前提にし、それをリアルに反映している部分もあるが、また一方においては、庶民の夢や願望を描いていることもある。しかもなかには、現実にはとうてい実現不可能な願望をフィクションの世界で示そうとする、ユーモアあふれる、奇想天外な面白い作品もみられる。その一つの例が、「若返りの風車」である。このモチーフは一つの印刷所だけの発明ではなく、大衆文化のなかの伝統として古くから存在するものである。GK社では『女の風車』(NRGK-05772-Die Weiber-Mühle, 1872年)と『男の風車』(NRGK-06142-Die Herren-Mühle, 1880年頃)がある。

『女の風車』の図版では、1枚の絵のなかに時間の経過を伴う一連の若返りの過程が描かれている。まず、画面の左端で、老婆たちが手押し車などで連れてこられ、次に、画面中央奥で、老婆たちがロープで釣りあげられ、第三に、画面の上部で、老婆たちが、穀物を入れて粉にする大きな漏斗の口の中へ放り込まれる、第四に、この不思議な風車の機械にかかった後、画面の右端で、若い美人となって出てくる、最後に画面の中央で夫に出迎えられる、というものである。テキストは次の4連の韻文である。

女たちよ、しわが増え、  
ツエをついて歩かねばならず、  
高齢が重くのしかかるなら、

さあ、この風車へはいりたまえ。

男たちに嫌われ、  
舌のろれつも回らず、  
いつも機嫌を悪くしているなら、  
ここに助けが用意してある。

しわはピンと伸び、  
間違いなし、失われた愛も  
再び分かち与えられよう。  
若返りの値段は安いもの。

ケンカすることもなくなり、  
どんなガミガミばあさんも、  
やさしい天使のごとく、  
かわいく、上品になるのだ<sup>11</sup>。

この作品と一対をなすのが、『男の風車』である。この図版も1枚で若返りの過程を描いている。画面右側手前に老夫たちが、かつがれるなどして運ばれてくる、画面左上で、老夫たちが機械にかけられる、画面中央手前では若返った紳士たちが風車から出てくる、画面左手前で、若い女性たちに出迎えられる。『女の風車』では、若返った妻を迎えるのは、老人の夫であったが、『男の風車』では、どういうわけか、若返った男性を迎えるのは、老婆ではなく、若い女性である。つまり女性は本人が若返っただけで満足させられるのに対して、男性は本人が若返っただけではなく、伴侶まで若

---

11 Hirte, Werner (hrsg. von): *Die Schwiegermutter und das Krokodil*, Berlin (Eulenspiegel Verlag), 3. Aufl., 1975, S. 25.

くなる（若返った妻か、若い別の伴侶かは不明）という願望が示されている。この作品にも次のような4連の韻文が印刷されている。

女たちよ、男たちがもの足らなくなったら、  
男たちが痛風に苦しんで、  
その禿げ頭が嫌になったなら、  
わが風車がお助けいたそう。

もはや生きる喜びも冷え切り、  
娯楽も、ダンスも、面白いこともせず、  
しつこく、君たちにぶつくさ言う男たちを、  
わが風車は別人に仕立てよう。

まがった背中ではまっすぐに  
君たちの気分ぴったりとなり、  
じつに幸福にしてくれる、  
そのために風車あり。何と喜ばしいことか。

腰を曲げ、人生の重荷に耐えてきた人よ、  
体が弱り、目も衰えたという人よ、  
そういう人がここで新たな力を  
ふたたび得る。力強い姿に若返る<sup>12</sup>。

ノイルピーンのエーミケ・ウント・リームシュナイダー社（以下、O&R社）も繰り返し、ほぼ同じ内容のボーゲンを発行している。まず1850年には『新・男の水車、新・女の風車』（NROR-01819-Die Neue Männermühle, Die

---

12 A. a. O., S. 24.



Neue Weibermühle) を発行している。これは一枚のボーゲンに、男性用と女性用の2枚の画像をセットで印刷したものである。男性用の画像が、風車ではなく水車として描かれている点は異なっているが、大きな漏斗に入れて若返らせるという装置は同じである。ここでは若返った人を迎えているのは、男性のほうは若い女性であるが、女性のほうはペアになる人がおらず、老女が若返った女性を見て驚いている様子が描かれている。同社では1887年にも同じ題名のボーゲン (NROR-08413-Die Neue Männermühle, Die Neue Weibermühle) (男性用と女性用のセットの2枚の図版) を発行している。1850年の作品とテキストは同じであるが、図版は入れ替えている。ここでは男性用は入り口部分しか描かれていないので、風車なのか水車なのかは分からない。女性用は風車の羽根の一部が描かれている。ここでも若返った男性は若い女性と腕を組んでいるが、若返った女性のほうは、年配の男性と、しわの寄った老女に出迎えられている<sup>13</sup>。

## 5. 現実の逆転、「さかさまの世界」

前項では、現実には不可能な願望を示す作品を扱ったが、現実とは逆の世界を描き、常識をひっくり返す、ユーモラスな作品もある。逆転のパターンとしては次のような対称軸が見受けられる。①上下の反対、前後の反対 (逆立ちなど)、②人間と物、人間と動物の立場の逆転、③男女の逆転、④大人と子供の逆転、⑤社会階層間の立場、あるいは弱者と権力者 (健常者) の立場の逆転、⑥社会的モラルの逆転 (怠け者ほど有利になるなど)、⑦そのほかの常識 (自然と社会の法則) に反する、などである。

GK社発行の『さかさまの世界』(NRGK-00281-Die verkehrte Welt, 19世紀後半発行) では24コマの逆転の発想が描かれている。テキストと絵は次のとおりである (かっこ内は絵の概略説明、丸数字は逆転のパターン)。

---

13 Riedel/Hirte, a. a. O., S. 94f.

- (1) 「この男の人は地球の上に逆立ちしている」(サーカスの会場のよう  
なところで男性が大きな丸い地球儀の上で逆立ちをしている、①)
- (2) 「風が地面を走り、男の子たちが空を飛ぶ」(風上げの風に足が出て、  
地上を走っており、紐がつけられた子供たちが風のように空に浮かん  
でいる、②)
- (3) 「犬がベッドの上で寝て、主人がベッドの傍らで寝る」(寝室が描か  
れ、大きな犬がベッドの上に横たわり、手前の床の上に男性があおむ  
けに寝ている、②)
- (4) 「雄鶏が卵を孵化する」(籠の中に雄鶏が座って、抱卵している様子、  
めんどりは籠の手前で遊んでいる、③)
- (5) 「風車が逆立ちする」(強風のような線が背景に描かれ、風車小屋が  
屋根を下にして転覆している、①)
- (6) 「男の人が犬小屋に寝て、犬が散歩する」(画面左の犬小屋の中から  
男性が顔を出し、右手には犬が紳士服と帽子的な服装で、眼鏡と杖を持  
ち、2本足で立っている、②)
- (7) 「教会が塔の先で逆立ちする」(教会が屋根を下にして逆立ちしてお  
り、塔の先が地面に刺さっている、①)
- (8) 「伯爵が日雇い男の靴を磨く」(カーテンのある立派な部屋で、はだ  
しの男が豪華な椅子に座り、山高帽に蝶ネクタイの紳士が画面右側で  
立ったまま靴を磨いている、⑤)
- (9) 「子供が母親のゆりかごをゆする」(画面左手のゆりかごが傾いてお  
り、中には母親が入っている、右手にはそのゆりかごに手をかけて、  
小さな子供がゆすっている、④)
- (10) 「病人が健常者の世話をする」(病室のベッドに元気そうな人が入っ  
ており、その手前で頭に包帯をした病人が薬とさじを持って介護して  
いる、⑤)
- (11) 「木が梢の先で逆立ちし、人間が逆立ちして歩く」(2本の木が枝を  
地面に這わせ、根っこを上になっている、そして二人の男性が逆立ちし

て手で歩いている、①)

- (12) 「女性が兵士となり、男性が子守りをする」(画面左手にスカートを  
はき軍帽をかぶって銃を持つ女性が立ち、右手には赤ん坊を抱いた男  
性が立っている、③)
- (13) 「農夫が砂の上でスケート靴を滑らせる」(屋外でスケート靴をはい  
た男性が走っている様子、⑦)
- (14) 「男の人が氷の上で草を刈る」(草のない戸外で男性が大がきを振り  
回している、⑦)
- (15) 「視覚障害者が健常者を案内する」(教会の塔などを背景にした市街  
地で、帽子を目深にかぶった男性が先に立ち、もう一人の男性を連  
れていく様子、⑤)
- (16) 「犬が食事をし、主人が骨をしゃぶる」(テーブルクロスのある立派  
な食卓で、犬が椅子にすわり、皿からごちそうを食べている、テーブ  
ルの手前の床の上では男性が四つん這いで骨をしゃぶっている、②)
- (17) 「雁が狩人を鉄砲で撃つ」(手前の地面の上に大きな鳥が描かれ、鉄  
砲を発砲している、画面上の空の部分には狩人が両手を広げて飛んで  
いる、②)
- (18) 「羊がオオカミをさらう」(羊が打倒したオオカミを背中に乗せて運  
んでいく、⑤)
- (19) 「チューリップが庭師に水を注ぐ」(画面右手の巨大なチューリップ  
が、花びらで、じょうろを持ち、画面左側の男性に頭の上から水をか  
けている、②)
- (20) 「男が子供に食事を与え、女はたばこを吸う」(画面左手では女性が  
大きなタバコ・パイプを持って、煙を吐いている、右手では椅子に座  
った男性が子供を膝に乗せ食事を与えている、③)
- (21) 「奥方が奉公女のために荷物籠を背負う」(画面左手に立派な服装を  
した女性が大きな背負い籠を背に歩いて行く、右手にエプロンをした  
みすばらしい姿の女性が手ぶらでついていく、⑤)

- (22) 「御者が馬車を引く」(馬車を馬が引くのではなく、人間が馬の代わりに引っ張っている、②)
- (23) 「農夫が手押し車を逆さに引く」(男性が手押し車を押すのではなく、逆にして引っ張っている、①)
- (24) 「男の子が池から鳥を釣る」(男の子が池から魚網で鳥をすくいあげている、⑦)<sup>14</sup>

このようにしてみると、「さかさまの世界」にもさまざまな次元があることが分かる。人間が逆立ちをするというのは一種のサーカスの見世物のようで、この逆立ちの段階では無害な娯楽といえようが、教会がひっくり返るというのはかなり重要な社会性を含んでいると考えることはできないだろうか。教会はヨーロッパ社会の中で伝統的なヒエラルヒーの頂点に立ってきたものである。その教会をひっくり返すとなると、信仰の世界や教会の権威に対して強烈な批判をしていると捉えることもできよう。伯爵と日雇い男、奥方と奉公人との入れ替えも階級社会のなかでの逆転であるから、革命的思考が含まれているとも解釈できる。男性優位の社会のなかで、男女の役割転換という発想もたいへん興味深い。制作者はこれらの「さかさまの世界」は実際には絶対あり得ないという確信があるから、このように逆にしてみることができるのであろう。それほど19世紀の階級間の格差、男女の役割分担は強固であったということである。しかしその後の人間社会の歴史を現在の時点から捉えてみれば、少なくとも社会的な人間関係はこのような「さかさまの世界」がもはやさかさまではなくなっている部分もしばしばみられる。現代社会では、貴族と平民との格差、男女の役割などは明白に変化してきており、部分的であるにせよ、むしろ、「さかさまの世界」として描かれている内容はさかさまではなく、それが「さかさま」とされることがさかさまであって、興味深い。

---

14 Brakensiek, a. a. O., S. 88.

GK社の版番号688は1835年頃の発行の初期のものであり、タイトルをつけていないが、内容的には「さかさまの世界」である（NRGK-00688-Ohne Titel）。この作品は20のコマがあり、そのテキストと絵は次のとおりである（かっこ内は絵の概略説明、丸数字は逆転のパターン）。

- (1) 「雄鶏が胸を張って歩き、飼い主を町へ運ぶ。じきに今日の売り物は何だね、と声がかかるだろう」（服を着た鶏が立って、大きな籠を載せた手押し車を押している、籠のなかには山高帽をかぶった男性が入っている、②）
- (2) 「ロバ氏は人に仕えるのではなく、威張って命令する。どうしてロバにこんな芸当ができるのか」（画面左手に服を着て、杖を持ったロバが2本足で歩き、右側に男性が帽子を取ってロバに追従する、②）
- (3) 「クマが人間に踊りを仕込むとは。そんなことができたなら、クマはたいへんりっぱだ」（左手にクマが鞭と調教棒を持って立ち、右側に立つ男性に鞭をあてている、②）
- (4) 「ウサギが狩人になるとは不思議ではないか。ウサギには力も勇気もないのだから」（画面右手にウサギが狩人の服を着て立ち、鉄砲を持っている、左手ではこのウサギを見て驚く男性、②）
- (5) 「馬を止め、操るには、尻尾を握るのではなく、手綱を引かねばならない」（馬の上に騎手が前後を反対にして乗っており、馬の尻尾をつかんでいる、①）
- (6) 「斧を持った牛が肉屋を殺そうとしている。もし本当にこんなことになったら、笑っていただけるだろうか」（画面左の壁に足を縛られて逆さに男性がつるされている、右側に服を着てエプロンをした牛が2本足で立ち、大きな斧を振り上げている、②）
- (7) 「人間が車を引き、犬や馬が御者になるとは。人間は理性も動物のえさも失くしてしまったのか」（左手に車の綱を引っ張る男性、右手の車の上に女性の服装をした犬と男性の服装をした馬が座っている、②）

- (8) 「馬が鍛冶屋に蹄（ひづめ）の鉄を打つ。誰がそれを信じろと言うのか。馬は動物で、理性など持っているはずがない」（画面左で手すりに男性が手をかけ、片足を上げて、足の裏に蹄鉄を打ってもらっている、右側で馬がエプロンをつけて立ち、右手にハンマーを持ち、左手は男性の足を持ち上げて、蹄鉄を打ちつけようとしている、②）
- (9) 「一頭の馬が左へ、もう一頭が右へ行く。これで、鋤（すき）がうまくできるのかと、誰もが言うだろう」（2頭の馬が畑の鋤を引いているが、それぞれ馬は反対の方向へ進もうとしている、⑦）
- (10) 「犬が人間の背に乗って走るなど聞いたことがあろうか。ここにごらんの通りだ。まだ疑問の余地があるだろうか」（男性が四つん這いになり、その上に服を着て帽子をかぶった犬が馬乗りになっている、②）
- (11) 「勲章を下げた男が杖をつく男に服従する。まるで象が蚊を恐れるようではないか」（左手に立派な軍服を着た男性が、帽子を取り直立不動で立っている、右側に杖を持った年老いた男性が座っている、⑤）
- (12) 「がまん強い羊が羊飼いを追いたてるとは。羊にそんな力がなかったら、きっと昔のままに違いない」（左手に男性が座り込んでおり、右側に服を着た羊が2本足で立ち、鞭を男性にふるおうとしている、②）
- (13) 「いっそうばかばかしい事態が起こっている。いまでは魚が陸を好み、人間が水を好む」（池の水のなかに服を着た男性が入り、岸の上では魚が寝そべっている、②）
- (14) 「若者が知恵を備えた年配者に教えるとは。これではやがて道義も規律も消えうせるだろう」（左手に老いた男性が本を持ち、腰をかがめて立っている。右側に少年が椅子に座り、鞭を持って、偉そうにしている、④、⑤）
- (15) 「ヤギがラッパを吹き、ウサギがギターを弾く。さてどちらがより偉大な道化師だろうか」（左手に服を着たヤギがホルンを持って椅子に座り、右のソファでは服を着たウサギがギターを持って座っている、②）
- (16) 「君たちはのこぎりや斧をせっせと動かさなくてはならない。ごちそ

うを食べようと思うのだったら、どんどん働かねばならない」(のこぎりや斧を地面に放置したまま、男女が働かずに座っている、⑥)

(17) 「ワシとコウノトリが散歩する。人間は空を飛ぼうとする」(画面の手前では、ワシが女性の服を、コウノトリが男性の服を着て、腕を組んで地面を散歩している、画面後方では二人の人間が天使のような翼をつけ、空中を飛んでいる、②)

(18) 「明るい日中にランタンを持って歩くとは、全くおかしいこと。遠くからでもその愚者はよく分かる」(左手に男性がランタンを手を持って立っている、右手には太陽があり、光線が出ている、⑦)

(19) 「ここではネズミが猫を駆り立てる、おかしいではないか。まるで子供が大の大人を殴るようだ」(左手に小さなネズミが猫を追っている、右手には家の方向へ逃げようとしている大きな猫、⑤)

(20) 人間には歩くためにこそ2本の足がある。四足で歩くのは自然に反することだ(画面左の人物は逆立ちして、手で立っている、右手の人物はあおむけになり手足を地面につけ、体を起こしている、⑦)<sup>15</sup>

この作品は、GK社のもっとも初期に発行された(ツェパニックによれば1835年以前<sup>16</sup>)ものの一つで、まだ逆転の次元は素朴な段階にある。動物と人間との逆転が20コマ中12コマで大半を占め、また第5コマの前後逆転した騎手、第18コマのランタンと太陽、第20コマの四足人間など、たわいのないものがほとんどである。しかもテキストのなかに、「おかしいではないか」とか「自然に反する」などの制作者の意見が表明されているので、見る人にとってはいくらか押しつけがましく、絵とテキストの緊張関係が失われてしまっていて、少し興ざめするような印象を与える。第16コマなどは、働かない人を描いているだけで、「さかさまの世界」を描いているわけ

15 Zaepernick, Gertraud: *Neuruppiner Bilderbogen*, Leipzig (Seemann Verlag), 1972, Nr. 8.

16 A. a. O., S. 61.

ではない（もっともこの作品は「無題」であって、こっけいな、常識はずれの状態を絵と文とで示しているものであるから、すべてがさかさまの世界を描いているとは限らない）。しかし第11コマの勲章の将校と弱者の老人、第14コマの老人の生徒と子供の先生という逆転は社会的権威を問題にしており、社会批判的な要素を見出すことはできよう。第6コマの屠殺される肉屋はブラックユーモアといえよう。

O&R社でも同じテーマの作品を制作している。1857年発行の版番号3159は『さかさまの世界』という標題をつけている（NROR-03159-Verkehrte Welt）<sup>17</sup>。ここではこの作品の16コマの逆転パターンを述べておきたい。それは、1. 男の子が編み物する（③）、2. 犬が人間を調教（②）、3. 木が木こりにのこぎりをかける（②）、4. 赤ん坊が母親の子守り（④）、5. ヤギが肉屋を屠殺（②）、6. 手押し車が人間を押す（②）、7. リスが人間を飼育（②）、8. ロバが粉屋を使う（②）、9. 長靴が靴磨き屋を磨く（②）、10. シャボン玉が人間を飛ばす（②）、11. 義足者が競争する（⑤）、12. 月が人間を見る（②）、13. くるみ割り人形が人間にクルミを割らせる（②）、14. 鳥が人間を弓で射る（②）、15. 背負い籠が人間を担ぐ（②）、16. 騎手が尻尾を手綱にする（①）<sup>18</sup>、というぐあいである。

第1コマの男女の役割、第11コマの身体障害者の描写は、現在では「さかさまの世界」とはいえないであろう。これらは、月と人間が逆転するような絶対にありえない現実の逆の世界として描かれているが、現在では、男女の役割の固定化はかなり薄れ、またパラリンピックなどで身体障害者が競争しても何の不思議でもなくなっている。このような点ではこの作品には時代の制約が明白に見られるのではあるが、先ほどのGK社の688番

---

17 この作品については、拙稿「エーミケ・ウント・リームシュナイダー社の初期ビルダーボーゲンにおける文学テキスト付作品」、関西大学『文学論集』第61巻第3号、2011年、78頁以下を参照されたい。

18 Hirte, a. a. O., S. 103.



の作品（NRGK-00688-Ohne Titel）と比べると、この作品は、描写も生き生きとしており、滑稽な世界を思い切って図示し、ありえない設定から緊張感も伝わってくる。図によってこそこのような逆転の世界をおもしろく描くことができるということを示したボーゲンの傑作といえよう。第3コマでは人間の胸に大きなのこぎりがかかけられ、第5コマでも台の上に寝かされた人間にヤギが大きな包丁を突き刺しており、また、第14コマでは、空を飛ぶ無邪気な少年の腹の部分を、ふりしぼった弓の矢が狙っている。さかさまの世界を前提としているとはいえ、このような人殺し場面はぞっとさせるようなブラックユーモアそのものである。こうした刺激の強い描写が、単なる逆立ちなどの無害な逆転とは違った緊張感をもたらしていることは間違いない。また月と人間を逆に置く、あるいはシャボン玉と人間を逆転させるという、思い切った逆の設定の大胆さがこの作品を傑作に仕立てているともいえよう。

## 6. 「愛の木」

ボーゲンの傑作のひとつに、「愛の木」というモチーフを扱った作品がある。「愛の木」は、古くから民間に伝わっていた非現実的な願望のあらわれである。O&R社の作品（NROR-01690）では、大きな「愛の木」が画面いっぱいに描かれ、上半分の枝の部分には12人の男性が、「果実」として実っている。軍服やシルクハット、狩人や旅の職人などの服装をしており、職業はさまざまであるが、いずれも制服や山高帽などで盛装している。木の下の方の幹の周りには10人の若い女性が立っている。彼女たちも美しいドレスや帽子などで着飾っている。幹に近い二人の女性は力をあわせてのこぎりを幹に充て、木を切ろうとしている。テキストでは女性たちが「男性の実」を獲得するプロセスが順番に描かれている。まず枝を揺さぶるが、頑丈な幹なのでびくともしない。次に、降りてくるように優しく声をかけ、さらに、泣きさげんで、いっそ死んでしまうと脅しても効果がない。そこ

で最後にのこぎりを持ちだして、木を切り倒し、全員が「果実」を獲得するのである<sup>19</sup>。ここでは結婚相手を見つけないという自分たちの意思を最後まで貫き通す女性たちのたくましさが見られている。

GK社の制作したボーゲンにも同じ標題の作品（NRGK-05778-Der Baum der Liebe, 1885年頃）がある。この図版では、10人の男性と9人の女性が描かれている。大きな木の枝の部分に9人の男性が木の实として「実って」いる。軍服を着ている男性が2名、6名は市民服で、一人は後ろ向きなので不明である。木の周りの地面では7人の娘たちが、棒やロープを持ち、実を落とそうとしている。そのうち木の近くにいる二人はのこぎりを持って木を切り倒そうとしている。画面の右手では一人の女性が梯子を登って、上の男性に手をかけようとしている。そのさらに右側には、下に降りた男性と獲得した女性がペアになって腕を組み、立ち去ろうとしている。テキストは韻文で次のようにうたわれている。

美しい愛の木の  
緑の葉につつまれて  
枝の間に群なして  
座っていたのは愛の神たち。  
髪は、茶色、ブロンド、黒、  
細身も小太りも、みな、年は若い。  
まだ娘を愛したことがなく、  
皆、心は重くふさいでいた。

クリストヒェンとグストヒェンが  
愛の木の下を通りかかると、

---

19 Riedel/Hirte, a. a. O., S. 17. この作品については、拙稿の前掲論文（56頁以下）を参照されたい。

愛のあこがれの歌が聞こえ、  
彼女らの心は真っ二つに割れた。  
まあ、こんな機会はまたとない。  
早く、木を切り倒しましょう。  
あの実を全部、取りましょう。  
娘たちは急いで行動を始めた。

フィークヒェンも飛んできて、  
不思議な場面を見て取った。  
素早く縄を引っ張って  
男性の実を揺り落とそうとした。  
ハンヒェンはいさましく、  
帽子と杖の男の実を、  
落とそうと、棒でたたいた。  
愛の炎が駆り立てる。

だが、やさしいドリンデは  
恋にこがれた目つきをし、  
愛の木を眺め、心にぴったりの  
幸福な愛の相手を探す。  
葉の間から軽騎兵の姿が光る。  
エマは、梯子へ急ぎ、よじ登り、  
兵士をつかんでご満悦。

枝の奥ではあるが、十分  
手の届くところで、  
年取った男が泣いていた。  
マガレートヒェンは忍び寄り、

さっとこの男を引き下ろし、  
踊りながら去っていく。  
誰も相手がいないより  
年寄りの男でもいたほうがましよ。

一体どこにあるのだろう、  
すばらしい愛の木は。  
憧れに駆り立てられ、  
娘たちは愛の木を捜す。  
シャンペンを手を持つ男も、  
空っぽの財布の男も、  
悪事を働く男でも、  
結局は、妻を手にてきよう<sup>20</sup>。

O&R 社の作品では、女性たちが「男性の実」を収穫するのに、苦労を重ね、それにもかかわらず意思を貫き通して、最後には目的を達成している。これに対して GK 社の作品では、最初の二人がすでにのこぎりを持ち出し、綱や棒や梯子でそれぞればらばらに行動して、「果実」を獲得し、マガレートヒエンにいたってはもう腕を組んで出て行こうとしているのである。前者が、困難にあたってもその都度、対策を強化し、段階的にエスカレートしながら、女性の意思が最後には達成されるというプロセスを表現しているのに対して、後者では、この魔法の木さえ見つけられれば、すぐに「男性の実」が手に入るという安易な設定になっているようである。前者では、絶対にあきらめないという女性の執拗さが強調されて、ここに皮肉が込められているようにも解釈できよう。これに対して GK 社の作品では、女性

---

20 NRGK-05778-Der Baum der Liebe. ノイルビーン・ビルダーボーゲン資料センターの資料による。

たちの結婚願望ではなく、「愛の木」による男性の救済がむしろ重要な眼目になっているようにも見える。ここでは、女性たちはこれほど結婚することに夢中になっているのだから、男性は、たとえ「年取っていて」も、「財布が空っぽ」でも、焦ることなく、待っていればいいのだと、もてない男性を慰めることが、メッセージとして浮かび上がってくる。

## 7. 「現代女性の要求」

1854年頃に出版されたGK社のボーゲンに『現代女性の要求』(NRGK-02812-Ansprüche der modernen Frauen)という題を持つ作品がある。図版ではバラの花がふんだんに飾られた屋敷の庭園に、果物とコーヒーが置かれた円いテーブルがあり、立派な服装をした若い男性が椅子にすわって、片手に新聞を持ちながら、タバコを吸っている。テーブルの右手には若い美人の妻が立ち、胸の大きく空いた赤い華やかなドレスに身を包み、花の飾りをつけた帽子をかぶっている。テキストはこの妻が夫に向かって自分の要求を語るという内容である。要求は8連の韻文で書かれており、その概要は、(1)タバコを吸い、新聞を読むばかりでなく、私と会話をしてほしい、(2)私が新しい服や帽子を買っても文句を言わないでほしい、(3)妻の問題に干渉しないでほしい、(4)私が借金をしても、怒らずに返済してほしい、(5)私に十分な金銭を与え、その用途について指図しないでほしい、(6)情事を疑って詮索しないでほしい、(7)家にばかり居ないで、パーティに連れて行ってほしい、(8)私の言うことを聞いてくれなければ、大騒ぎをおこす、というものである<sup>21</sup>。

GK社のボーゲンでは控えめな女性が理想的であるというのが基調で、このような自己主張の強い女性が登場するのはまれである。おそらく制作者

---

21 Zaepernick, a. a. O., Nr. 35. この作品については、拙稿「19世紀中葉におけるグスタフ・キューン社発行の文学テキスト付ビルダーボーゲンについて」、関西大学『独逸文学』、第55号、2011年、18頁以下を参照されたい。

は、一方において、普段は言いたいことも言えない弱い立場の女性の要求を代弁して、女性に取り入ろうとしながら、他方において、この派手好きの女性を一種の「さかさまの世界」として示し、悪い見本として作り上げたのであろう。ウエストを絞り、襷の付いたロングドレスという、派手な女性の服装は、当時、ぜいたくな服装として堅実な市民からひんしゆくを買っていた「パリ・モード」<sup>22</sup>であった。ぜいたくを排除し、質素に暮らすことが生活信条であった多くの堅実な市民にとっては、借金をし、帽子屋、洋服屋を家に呼び寄せて、流行の服を作らせるのは「悪徳」であった。

しかしこうした事情を配慮しても、女性は男性に服従すべきであるという古い固定観念を破壊する、この女性の主張は、女性の権利拡大という視点からは貴重な発言であろう。ぜいたくをしたり、借金をしたりすること自体は、当然非難すべき問題点であろう。しかしもっと大きな問題は、女性が経済的に従属的な立場にあり、そして女性に対して忍耐と服従が求められていた当時の道徳観である。女性の側から「要求」を出すこと自体が、画期的で、女性解放の先駆的な表れであると歴史的に評価することができよう。

この『現代女性の要求』が出版される約25年前の1830年頃に、同じGK社から、この作品の古いヴァージョンが出版されていた。それは、『妻の夫に対する七つの願い』(NRGK-o. Nr. -Die sieben Bitten der Ehefrauen an ihre Männer)と題された作品である。図版は『現代女性の要求』とは異なっており、赤い派手なカーテンをつけた窓を背景にして、大きなパイプで煙草をくゆらせている若い男性が椅子に座っている。左手には緑の大きなリボンを頭につけたうえに、左手に派手な大きな緑の帽子、右手に赤いショールを持つ着飾った女性が立っている。テキストはほぼ同じであるが、『妻の七つの願い』の方は、それぞれの連に「第1の願い」から「第7の願い」までの小見出しがつけられ、第8連は「結論」という見出しになって

---

22 Blank, Melanie, u. a. in: Brakensiek, a. a. O., S. 82.

いる。このボーゲンの下の端に、「奥様方、たった1グロッシェン銀貨一枚で、あなたのご主人に、不平を持ちだされることなく、7通りにも読んで聞かせる文書が手に入りますよ」という、出版社の宣伝が書かれている。この宣伝文を見ると、出版社は通常は服従を強いられている女性たちの不満を理解し、これを代弁しようという意図があったようである<sup>23</sup>。

しかしこの『妻の七つの願い』は出版直後に、検閲により販売禁止となった<sup>24</sup>。宗教的な祈りを冒涇したというのがその理由である。聖書のマタイ福音書の6-9に「天にいますわれらの父よ」(Vater unser)で始まる、キリスト教徒の「七つの願い」がある。このボーゲンの標題が「七つの願い」となっていることが発売禁止の理由であるが、おそらく内容的に、おとなしくすべき女性が異例の主張を掲げていることが、社会の秩序を乱すとして、厳しく禁止されたと考えられ、宗教的な冒涇を口実にした、政治的な弾圧であろうと思われる。しかしGK社はこのような弾圧にもめげず、25年後にほとんど同じテキストで、図版もさらに大胆に胸もとを大きく開けた女性のより派手なスタイルでこの作品を復元した。ただし発禁の口実となった『七つの願い』というタイトルは削除し、『現代女性の要求』と変更したのである。

『妻の夫に対する七つの願い』と一対をなす作品として、GK社は1830年頃に『夫の妻に対する七つの願い』(NRGK-o. Nr. -Die sieben Bitten der Ehemänner an ihre Frauen)というボーゲンも発行している。図版は立派なカーテンのかかった部屋のなかでひと組の男女が立っている様子を描いている。テキストの内容からすると、時間は朝早くのようで、男性(夫)はまだナイトガウンを着ていて、手にコーヒー茶碗を持って、妻のほうを向いている。女性(妻)も朝起きたばかりのようで、やや色っぽくスカートから片足を見せて、靴下を履こうとしている様子である。テキストには

23 Hirte, a. a. O., S. 15.

24 Blank, Melanie, u.a. in: Brakensiek, a. a. O., S. 80.

次のように述べられている。

### 第1の願い

妻よ、もっと早く起きておくれ。

料理女にチコリ（代用コーヒー）を入れられないように。

妻たるものは朝早くから

台所に立つことが必要だ。

料理女が一人でいれば、

われわれの口に入るものがなくなってしまう。

一家の主人もコーヒーではなく、

チコリを飲まされるはめとなる。

### 第2の願い

午前中ずっとモード雑誌など読んでいないで、

しっかり家計のことをしておくれ。

かわいい妻よ、君が美しいのは、

流行の服を着るからではない。

家計をきちんと運ぶなら、

君はもっとすばらしくなるのだ。

流行を追う女性はたくさんいるが、

そんな連中は苦痛を生み出すだけだ。

### 第3の願い

君が他の男性と冗談を交わすとき、

夫がいることを決して忘れてはならない。

若い男は美しい女性と

恋の戯れをしたがるもの。

道義を守り、近づかないように。



すぐに彼らの本心が知れよう。  
いいかい、いつもしっかりと君には  
最高の夫がいることを胸に刻みなさい。

第4の願い

家計のお金を宝くじでなくさないでくれ。  
グロッシェン銀貨も30枚たまれば1ターラーだ。  
わが妻よ、ばくちなど、一切しないでくれ。  
それは幸せをもたらさない。  
分別をよくわきまえて、  
小銭でも大事に蓄えよ。  
そうすれば、たとえ飢饉が来ようと、  
財産が備わっているのだ。

第5の願い

一人で暗闇の中を外出してはならない。  
何に出くわすかしたのではない。  
夜になるとあちこちに、  
好色な若者が潜んでいる。  
やつらは罠を仕掛けて  
若い女性を捕まえるのだ。  
わが天使よ、君がそんな目に会ったら、  
僕は何と不幸になることか。

第6の願い

僕が若い女性とキスしても  
嫉妬などしないでくれ。  
僕が若い娘にキスしても

それはうっかりしていただけ。  
君は決して心を痛める必要はない。  
それは僕が知ってしただけではない。  
いちいち、とがめ立てはしないでくれ。  
君はずっと僕の妻なのだから。

#### 第7の願い

夫に対して最後の言葉まで言ってはならない。  
帰宅がどれほど遅くても、やさしくしてほしい。  
夫が遅く千鳥足で帰っても、  
ふてくされた顔をしないでほしい。  
やさしく語りかけ、  
決して喧嘩を売ってはならない。  
次の朝になれば、僕のほうから  
ごめんな、許しておくれ、と言うのだから。

#### 結論

かわいい妻よ、君が以上の願いを聞き入れるなら、  
僕は君を妻として愛し、大事にしよう。  
僕たちは争いもせず、邪魔されもせず、静かに暮らす。  
何か事が起こったら、互いに見ないことにしよう。  
男も女も間違いを全くしないなんてことはない。  
いちいちとがめ立てては、毎日喧嘩になるではないか<sup>25</sup>。

このように、夫から妻への要求は、(1)早く起きて家事をすること、(2)流行の服を着るのではなく、家計をしっかり運営すること、(3)他の男性に注

---

25 Hirte, a. a. O., S. 14

意すること、(4)宝くじに手を出さず、貯金すること、(5)危険な夜に外出しないこと、(6)夫の情事に目くじらを立てず、見逃すこと、(7)夫が酔っ払って帰っても、忍耐強く耐えてくれること、である。女性には、家事、儉約、忍耐が強く求められていたようである。情事に関しては、『妻の要求』においては、「詮索することはやめてほしい」であったが、『夫の要求』では「若い娘にキスをしても見逃せ」となっており、要求内容にはかなり程度の差がある。夫は公然と不倫をしてもかまわない、妻は耐えるべきだという風潮であったように思われる。

このボーゲンも下のほうに、発行所の宣伝があり、「ご主人方、1 グロッシェン銀貨1枚で、奥さんのための7つの特効薬をお買いください」と書かれている。この作品も、「七つの願い」という標題のために、宗教的冒涇のかどで、発売禁止となった。

## 8. まとめ

家庭問題を扱ったビルダーボーゲンについて、いくつかのテーゼにまとめておきたい。

- (1) ミュンヘン・ビルダーボーゲン（ブラウン・ウント・シュナイダー社）やシュトゥットガルト・ビルダーボーゲン（グスタフ・ヴァイゼ社）が、主として文学的な作品などのフィクションの世界を扱っているのに対して、ノイルピーン・ビルダーボーゲンは印刷物によって、大衆に情報を提供し、「教育」しようとする「啓発的」意図をより強く持っていたと思われる。家庭の問題においては、女性の教育が社会道徳として重視されていたようである。
- (2) 女性の道徳として求められていることは、「家庭性」、「従順さ」、「控えめな態度」、「儉約」、「忍耐」などで、男性に対してはこのような要求は持ち出されてはいない。ここには19世紀の市民社会の「ビーダーマイアー」的な家庭観が色濃く反映されていることが確認できる。

- (3) ビルダーボーゲンはしかし、道徳の教科書ではなく、大衆的な娯楽なので、ユーモアや、現実から離れたフィクションの世界のおもしろさも持ち出す。「さかさまの世界」、「若がえりの風車」、「愛の木」のような民間に伝わる滑稽なイメージを、図示することによって、非現実的な願望を描くことに成功した。この中でしばしば、19世紀の望ましい「家庭性」が逆転していることがある。それは時代の制約を受けた固定観念に風穴をあけるものでもあり、そこに新鮮な変革の萌芽があることも見出される。

#### 【付記】

本論文は、科学研究費・基盤研究 (C)「ドイツにおける大衆的文学・芸術の発展——ベルリンの大衆芸術」(課題番号：21520355、研究代表者：宇佐美幸彦)の助成を受けて執筆された。